

ニュートン図形と特異点解消

数学特別講義 XX 2022 年 10 月 6 日 (金) 4 限 担当 福井敏純

ニュートン非退化な関数に対しニュートン図形を使った, 特異点解消の構成を説明する.

2 変数正則関数 $f(x, y) = \sum_{\nu} c_{\nu} x^{\nu_1} y^{\nu_2}$ に対し, そのニュートン図形 $\Gamma_+(f)$ を次で定める.

$$\Gamma_+(f) = \{\nu + \mathbb{R}_+^2 \mid c_{\nu} \neq 0\} \text{ の凸包}$$

ベクトル \mathbf{a} に対し $m(\mathbf{a})$ と $\gamma(\mathbf{a})$ を次で定める.

$$m(\mathbf{a}) = \min\{\langle \nu, \mathbf{a} \rangle \mid \nu \in \Gamma_+(f)\}$$

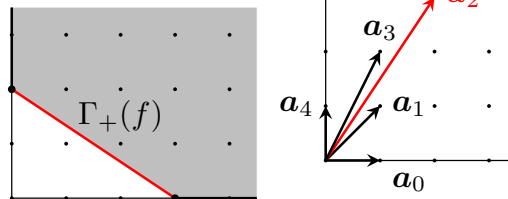
$$\gamma(\mathbf{a}) = \{\nu \in \Gamma_+(f) \mid \langle \nu, \mathbf{a} \rangle = m(\mathbf{a})\}$$

さてベクトル

$$\mathbf{a}_0 = \begin{pmatrix} a_0 \\ b_0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix}, \mathbf{a}_1 = \begin{pmatrix} a_1 \\ b_1 \end{pmatrix}, \dots, \mathbf{a}_{k-1} = \begin{pmatrix} a_{k-1} \\ b_{k-1} \end{pmatrix}, \mathbf{a}_k = \begin{pmatrix} a_k \\ b_k \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 0 \\ 1 \end{pmatrix}$$

を $\det(\mathbf{a}_{i-1} \ \mathbf{a}_i) = 1$ なるように取る. このとき $\gamma(\mathbf{a}_i)$ は $\Gamma_+(f)$ の面であるが, すべての $\Gamma_+(f)$ の面がこの形で得られるように \mathbf{a}_i を取っておく.

例 $f(x, y) = y^2 - x^3$ のとき, ニュートン図形 $\Gamma_+(f)$ は右図のようになり, ベクトル \mathbf{a}_i は図の様に取れば良い.



$$G = \{(z_0, \dots, z_k) \in (\mathbb{C}^*)^{k+1} \mid z_0^{a_0} z_1^{a_1} \dots z_k^{a_k} = z_0^{b_0} z_1^{b_1} \dots z_k^{b_k} = 1\}$$

は自然な乗法に関して群になる. G の元 (z_0, z_1, \dots, z_k) は

$$U = \bigcup_{i=1}^k U_i, \quad U_i = \{(u_0, u_1, \dots, u_k) \in \mathbb{C}^{k+1} \mid u_j \neq 0, j \neq i-1, i\},$$

に次で作用する.

$$(z_0, z_1, \dots, z_k) : U \longrightarrow U, (u_0, u_1, \dots, u_k) \longmapsto (z_0 u_0, z_1 u_1, \dots, z_k u_k)$$

U の点で G の元で移り合う点を同一視して得られる集合を $M = U/G$ と書く. すると

$$\text{写像 } \tilde{\pi} : U \longrightarrow \mathbb{C}^2 \text{ は 写像 } \pi : M = U/G \longrightarrow \mathbb{C}^2 \text{ を定める.}$$

$V_i = \{(v_{i-1}, v_i) \in \mathbb{C}^2\}$ と $\{(1, \dots, 1, v_{i-1}, v_i, 1, \dots, 1) \in U_i\}$ を同一視しておく. 写像

$$\tilde{\pi}|_{V_i} : V_i \longrightarrow \mathbb{C}^2, (v_{i-1}, v_i) \longmapsto (x, y) = (v_{i-1}^{a_{i-1}} v_i^{a_i}, v_{i-1}^{b_{i-1}} v_i^{b_i}) \quad (1)$$

による $(\mathbb{C}^*)^2$ の点の逆像は 1 点からなる事に注意しよう. 実は V_i の M への自然な像が M 全体を覆い, M には多様体の構造が入る. V_i 達は自然に貼り合うが, 貼り合わせの関係式を見る

には、次の様にすればよい。 V_i の点 (v_{i-1}, v_i) と $V_{i'}$ の点 $(v'_{i'-1}, v'_{i'})$ が G の元で移りあえば、 $v_j = 1$ ($j \neq i-1, i$), $v'_j = 1$ ($j \neq i'-1, i'$) として関係式

$$z_j v_j = v'_j, \quad j = 0, 1, \dots, k, \quad z = (z_0, z_1, \dots, z_k) \in G \quad (2)$$

があることになる。 (2) を z を未知変数とする方程式を見て z について解くことはそれ程難しくない。 その解 z を (2) に代入して (v_{i-1}, v_i) と $(v'_{i'-1}, v'_{i'})$ の間の変換式を得る。

定理 写像 $\pi: M \rightarrow \mathbb{C}^2$ は固有写像である。 即ち、次を満たす。

M の任意の点列 $\{\mathbf{p}_m\}$ に対し「 $\{\pi(\mathbf{p}_m)\}$ が収束すれば $\{\mathbf{p}_m\}$ は収束部分列を持つ。」

証明. $\mathbf{p}_m \in \pi^{-1}(\mathbb{C}^*)^2$ として証明すれば十分。 $\pi(\mathbf{p}_m) = (x(\mathbf{p}_m), y(\mathbf{p}_m))$ は有界なので $\log|x(\mathbf{p}_m)| \leq L, \log|y(\mathbf{p}_m)| \leq L$, なる正定数 L が存在する。 $\{\mathbf{p}_m\}$ をその部分列に取り直して

$$\begin{pmatrix} L - \log|x(\mathbf{p}_m)| \\ L - \log|y(\mathbf{p}_m)| \end{pmatrix} \in \langle \mathbf{a}_{i-1}, \mathbf{a}_i \rangle_{\mathbb{R}_{\geq}} \quad (3)$$

を満たす i があるとして良い。 $(\mathbf{a}_{i-1} \ \mathbf{a}_i) \begin{pmatrix} L_1 \\ L_2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} L \\ L \end{pmatrix}$ なる L_1, L_2 を取ると

$$(\mathbf{a}_{i-1} \ \mathbf{a}_i) \begin{pmatrix} L_1 - \log|v_{i-1}(\mathbf{p}_m)| \\ L_2 - \log|v_i(\mathbf{p}_m)| \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} L - \log|x(\mathbf{p}_m)| \\ L - \log|y(\mathbf{p}_m)| \end{pmatrix}$$

となり、(3) より、 $L_1 - \log|v_{i-1}(\mathbf{p}_m)| \geq 0, L_2 - \log|v_i(\mathbf{p}_m)| \geq 0$ がわかる。 よって $(v_{i-1}(\mathbf{p}_m), v_i(\mathbf{p}_m))$ は有界なので収束部分列を持つ。 \square

f がニュートン非退化とは、 $\Gamma_+(f)$ の任意の面 γ に対し

$$\{(x, y) \in \mathbb{C}^2 \mid x \partial_x f_\gamma = y \partial_y f_\gamma = 0\} \subset \{xy = 0\} \quad (4)$$

が成り立つときを言う。 ただし $f_\gamma = \sum_{\nu \in \gamma} c_\nu x^{\nu_1} y^{\nu_2}$ 。

定理 f がニュートン非退化なら π は f の特異点解消を与える。 つまり、 M の任意の点の近傍で $f \circ \pi$ が単項式で表されるような座標系が取れる事を主張する。

証明. (1) を使って \tilde{f} を次で定める。

$$f \circ \pi = \sum_{\nu} c_\nu x^{\nu_1} y^{\nu_2} = \sum_{\nu} c_\nu v_{i-1}^{\langle \nu, \mathbf{a}_{i-1} \rangle} v_i^{\langle \nu, \mathbf{a}_i \rangle} = v_{i-1}^{m(\mathbf{a}_{i-1})} v_i^{m(\mathbf{a}_i)} \tilde{f} \quad (5)$$

\tilde{f} が $\{v_{i-1} = 0\}$ と横断的に交わることを示す。 $\gamma = \gamma(\mathbf{a}_{i-1}), \gamma' = \gamma(\mathbf{a}_i)$ と置くと次がわかる。

$$\tilde{f}|_{\{v_{i-1}=0\}} = \sum_{\nu \in \gamma} c_\nu v_i^{\langle \nu, \mathbf{a}_i \rangle - m(\mathbf{a}_i)} = \widetilde{f_\gamma}, \quad \tilde{f}|_{\{v_{i-1}=v_i=0\}} = \widetilde{f_{\gamma \cap \gamma'}} \neq 0 \quad (6)$$

(1) から $x_{v_{i-1}} = a_{i-1}x/v_{i-1}, x_{v_i} = a_i x/v_i, y_{v_{i-1}} = b_{i-1}y/v_{i-1}, y_{v_i} = b_i y/v_i$ なので

$$v_{i-1} \partial_{v_{i-1}} = a_{i-1} x \partial_x + b_{i-1} y \partial_y, \quad v_i \partial_{v_i} = a_i x \partial_x + b_i y \partial_y \quad (7)$$

を得る。 これと (4) より

$$\{(v_{i-1}, v_i) \in \mathbb{C}^2 \mid v_{i-1}(\tilde{f}_\gamma)_{v_{i-1}} = v_i(\tilde{f}_{\gamma'})_{v_i} = 0\} \subset \{v_{i-1}v_i = 0\}$$

がわかり、 $\tilde{f} = v_{i-1} = 0$ のとき $v_i \neq 0$ かつ $f_{v_i} \neq 0$ がわかる。 \square